

キリストの十字架受難―神の恙の贖罪―死よりの復活―聖霊による新生(世界人類の救の礎石)。いずれも恩恵の後に使命がある。そして、いずれもメシヤの再臨信仰をもつ。

イエス様の受難により、迫害の波及を怖れて四散していた弟子達(十一使徒に限らず、沢山の弟子達Ⅱルカ十・一―七〇人)は、彼等の心に刻まれた御生前のイエス様の鮮かな個性、追いとめてやまない、その潔い兄弟愛、深い祈、困苦にめげない高い情熱、一人一人の魂を引付けて離さない高貴な、ある人格の力、その人格の刻印を胸に、慕い奉る我が師イエス様として、二人、三人とエルサレムの兄弟の家に寄り集まったのであろう。その家は最後の晩餐の行われた、マリヤとヨハネ・マルコ(マルコ福音書の著者)の家であったかも知れぬ。五旬節は過越の祭と共に、海外離散のユダヤ人達が、多く神の家エルサレムに参集した。そしてイエス様を愛慕し、復活の奇蹟に不思議な感動を覚えていた弟子達の魂は、おほろげなメシヤ・イエス来臨の期待を抱いたかと思う。それはまさに乾き切った祭壇の薪に油が豊かに注がれた状態であったと思う。聖霊降下は、五旬節中のイエス様の復活を覚える聖日の朝の九時、宮の境内で心をあわせて祈禱中に(神殿の祈り時間)Ⅱブルース・行伝Ⅱ突如、霊火が彼等の魂を根底から焼き尽した。古来のイスラエル宗教に於いて、火は主の御臨在の徴である(出エ記三・三。十三・二一。イザヤ六・六。ルカ十二・四九。ヘブル十二・二九。)炎の舌状は、パウロの場合より

も更に原始的エクスタシーな状況であるが、彼等は霊に酔い「旧きは既に過ぎ去り、視よ!新しく」されたのであろう。生けるキリスト・イエスが彼等が臨み、彼等の活発な活動の原動力となったのであろう。

註、信仰に或転機はある。然しペンテコステの聖霊降りは特殊なケースである。然も人為ではない点に注意を要する。

しかし信仰の生きて活動する所は又、サタンの狙う強襲点でもある。不思議に思うことは、彼等のうちでも、ヘレニスト(海外からの)ユダヤ人が、この霊火を最も豊かに受け容れたのではないかと思われることである。そして、リベルデンのユダヤ教徒や、サンヘドリンの攻撃の焦点も彼等にあわせられる。エルサレム集会の分解も、古き皮袋を破る生命として溢れでて(迫害により四散するヘレニスト達)、そこからはじまるのである。私は、エルサレム集会は、時の経過と、共に自づと三つのグループに大別されて、移り変っていったのではないかと思う。第一は、ステパノを中心とするヘレニスト達のグループ。その二は、ペテロ・ヨハネ等の使徒達を中心とした、イエス様の御生前からの弟子達のグループ。その三は、イエス様の十字架後、ことにペンテコステ後多数入会した人々のグループであって、この人々は、聖霊による明確な回心意識なしに、エルサレム集会を、イエスという一予言者によつてはじめられたユダヤ教の新興一宗派位に考えて、その信仰内容に、霊、天使、メシヤ来臨と最後の審判、義人の復

活、神の国等を信じた、律法に熱心で真面目なパリサイ派から帰依したグループである（行伝十五・五）。彼等は御生前のイエス様が、腐敗した神殿宗教の俗化、形骸化に鋭い警告を発し、なわの鞭（予言者の行動）をもって、宮潔めをなし、昔の予言者の如く、宗教の特権階級と衝突して、殉教の死をとげられたものとして、共鳴を感じたのかも知れぬ。

註、キリストの顕現について

コリント前・十五・五〜六。尚、信者数の行伝二一・四一、三千人。四・四、五千人は少しく過大に思う。

初期エルサレム集会内に、人数に於いても、信仰に於いても相対の勢力を占めたと思われる海外ユダヤ教徒から帰依したヘレニスト達が（或は彼等は、ローマからの解放奴隷ユダヤ人、即ち「リベルテン」会堂所属の分離信徒達であろうか？）どのようにして、エルサレム集会に加入していったか？或はその一部の人々はイエス様の御生前から従っていたのであるか？浅学の私には解らない。唯、然し、既に遠いエレミヤの言葉に

「私は近くに在る神であろうか、むしろ遠くに在る神ではないか」ーとヤハウエは言われる。

「わたしは天地に満つるものではないか」

とヤハウエは言われる！。

エレ・二三・二三〜二四B（関根先生訳）

又、エレミヤもエゼキエルも、「心の割礼」を宣べて信仰の形骸化を警告している。イスラエルの歴史に於いて、国は亡び、エルサレム神殿は破壊され、民の優秀分子は凡て捕えられてのバビロン捕囚の経験は（この場合に、北イスラエルの場合と異なり、法典、予言者の言葉が文書化して伝えられていたことは大切な要因であると思うが）多くの古代東方宗教に触れて、その神観、信仰、祭儀共に、みのり豊かな収穫をもたらした。律法、予言書の編纂もこの期になされた。

丁度そのように、多くの離散（ディアスポラ）のユダヤ人が、ヘレニズム世界の諸都市に住み、オリエントの多くの宗教の潮流の中で採まれつつ（オリエント宗教の神秘主義ー（秘義ー奥義）、後期ギリシャ哲学、やがてグノーシス思想等）会堂で祭儀宗教でなしに、正典（聖書）による文字の宗教を守つて来たということ。そのことが、自づと、広い視野をもつヘレニスト・ユダヤ人達（殊に後のタルソのパウロの如きヘレニスト）が、ギリシャ語で読む聖書から受ける影響と共に、キリスト教の思想的発展に豊かな内容をもちこんだと考えるのである。

「わたしは天地に満つる」神、ローマ帝国内のいたる所のシナゴクで、安息日毎に正典で語りかける神。この点で、エルサレムの神殿祭儀宗教と、その権力に強く支配されたパレスチナの（特にユダヤの）保守的信仰と異なるものがあつたと考える。彼等は隣

人サマリヤ人と交らず、「異邦人のガリラヤ」と軽蔑したのである。(マタイ・四・十五)

註、パウロの思想の中に東方宗教の神秘主義の影響(コリント前三・二。一乳。後五・四。コロサイ二・十一。三・九。一脱ぐ)―異邦人に解り易く説明するために引用した―の言葉や、ギリシャの詩人クレアンテス(BC三〇〇頃)の詩句を引用(行伝十七・二八)している。グノーシスに対する警告はコロサイ二・八等。しかし、ヘブライ思想の根幹はゆるがない。ヤハウエとキリストを混同することはない。又パウロは当時のユダヤのラビ達の譬喩的(アレゴリカル)な解釈法を多く用いている(コリント前・九・一。十・一、四。後・三・十二、十四等)。

但し凡てのヘレニスト・ユダヤ人達が、広い視野と自由な見解をもったということではなく、海外異教徒の中で強く生きるユダヤ人達が強い民族主義、排他思想、律法主義、シオニスト達が多かったことは自然である。パウロの迫害や、屢々命が狙われた事でも解る。とも角、エルサレム集会の中でいろいろわけしてみた三つのグループのうち、イエス・キリストの十字架の意味するものを、最も鋭く、自由な角度から把握して、活発に活動したのは、ステパノを中心とするピリポ等七人の執事とバルナバも含むヘレニスト・グループであった。

行伝六章一―六の記事は、彼等の集会内に於ける活発活動、革新的意見等が、自然と発言権に反映して、ささいな「日日の配

給」や「食事のこと」に端を発して、伝統に束縛される信仰の人々と摩擦を起したものと思われる。しかも七節には「こうして神の言は、ますますひろまり、エルサレムにおける弟子の数が、非常にふえていき、祭司たちも多数、信仰を受けいれるようになった。」の一句は注目に値する。勿論、祭司のうちにはザカリヤ(ルカ一・八)のような敬虔な下級祭司もいたではあろうが。

そして、この新しい勢力を抑圧することは、反つてエルサレム集会の分裂につながる様相となっていたのではなからうか。事実、食事のことで選ばれた彼等七人は、すべてギリシャ名をもつヘレニスト達で、しかも食事のことを扱うような人々ではなく、有力な伝道活動家達であつたと思われる。「執事」という語は、後の教会からの反映で、教会の財務管理者。唯、調和的なルカの筆が、エルサレムの使徒職優先の按手札(六・六B)にもみられる。彼等ヘレニスト達の筆頭はステパノで、「信仰」と聖霊に満ちた人」であり、「ステパノは恵みと力とに満ちて、民衆の中で、めざましい奇跡としるしを行っていた。」と。恐らくこのステパノが旺盛な伝道心に燃えて、海外ヘレニスト・ユダヤ人達の会堂(「リベルデン」の会堂に属する人々、クレネ人、アレキサンドリヤ人、キリキヤやアジアからきた人々など)で福音の証の論戦を挑んだのであろう。

註、「アジア」は小アジアのローマの行政州。パウロの出身地タルソはキリキヤにある。但し、ステパノとパウロとの出会いは

あり得ること。私には断定はできない。七人の一人であるアンテオケのニコラオは異邦人の改宗者であった。改宗者とは正規の割礼を受けて、ユダヤ教に帰依しユダヤ人の民籍を与えられた異邦人。

伝統を守る神殿宗教の保守勢力は、自己防衛の本能的直覚で、自分達に最も危険な敵が誰であるかを知る。「知恵と御霊とで語る」ステパノに対して「リペルデン」の会堂に属する人々は到底対抗できなかった。

彼等はステパノの論鋒に怒りに燃えた。私達は彼等が最高宗教法院（サンヘドリン）に告訴する証言の中に、確かにステパノが述べたであろう論旨の半面を認めうる。反対者の側の耳には「わたしたちは、彼がモーセと神とを汚す言葉を吐くのを開いた」であろう。又議会上に立てた証人にしても、「偽りの証人たち」という言葉は、キリスト教側からの言葉で、「この人は、この聖所（神殿）と律法とに逆う言葉を吐いて、どうしても、やめようとはしません。「あのナザレ人イエスは、この聖所を打ちこころし、モーセがわたしたちに伝えた慣例を変えてしまおうだろう」などと言う」と。

この訴え側の証言は大筋に於いて事実であるに相違ない。私達は、ここに、はからずも、訴え側の証言によって、殉教の厳しい戦の中にイエス様からステパノへ、ステパノからパウロへと承け

継がれた、福音の生命が何であるかを知る。それは常にカソリック形骸化に対するプロテスタントの抗議精神である。

参照引用句。

マルコ十四・五八。マタイ二七・四〇。↓行伝・六・十三〜十四。七・四八。↓コリント前・三・十六。後・六・十六。

ヨハネ福・七・二三〜二四。↓行伝七・五一。（ああ、強情で、心にも耳にも割礼のない人たちよ）。↓ロマ二・二九。ピリピ三・三B。

とも角、サンヘドリンに於けるステパノの演説は、従来のイスラエル民族の歴史解釈と異り、恩恵に対する彼等の反逆、律法主義者の偽善性に対する厳しい攻撃、神殿宗教の違法性と廃棄、イエス・キリストの十字架と聖霊に対する頑な拒絶と心の割礼等、それらは、選民中の選民を以て自任する彼等の独善主義に切込む、自由な角度からの鋭い批判である。

激昂する民衆とサンヘドリンの議員達の嵐の前に、一瞬の静寂がある。動と静と。「ああ、天が開けて、人の子が神の右に立つておいでになるのが見える」と。

恐らくステパノの石打ちの殉教は、サンヘドリンの正式な判決も待たず殺到した民衆による私刑であつたらう。

「彼らがステパノに石を投げつけている間、ステパノは祈りつづけて言った、「主イエスよ、わたしの霊をお受け下さい」。そして、ひざまずいて、大声で叫んだ、「主よ、どうぞ、この罪を

彼らに負わせないで下さい」。こう言って、彼は眠りについた。」と。それは、大きな鏡に対する、小さなあわせ鏡の反映である。(ルカ二三・三四、四六。)

註、イエス様の純福音は、ヘレニスト、ステパノへ、ステパノから、ヘレニスト、パウロへと継承された。確かに行伝七・五八Bと八・一Aのステパノとパウロの関係、こういう劇的な出会いが、第一資料であるパウロの手紙に一言の言及もないことは、奇異を感じる。ボルンカムは、ルカの筆による結合として否定する(パウローその生涯と使信―現代神学双書P四六)。しかし、年代からいつても、活動の舞台から考ても、この両極のヘレニストの火花は、ありうることを考える。(石原兵永先生、パウロの生涯・P一七〜一八。)

エルサレム集会に対する大迫害が起こって四散したのはヘレニスト・グループの人達であった。くもの子を散らす如くに。但し生命の光を掲げて。宗教的偏見から使徒達すら、ちゅうちょしていたサマリヤ伝道に挺身したピリポの活動が行伝八・四〇〜四一に示るされた。独りピリポに限らなかつたであろう。私達はすでにパウロの回心まえにダマスコにヘレニストの集会があり、シリアのアンテオケ集会も、ローマの集会も、パウロの建設した集会ではなかつた。アンテオケ集会は異邦人への初期福音伝道の基地集会の役割を果たしたことを知っている。

次に中間派とも言うべき、主、イエス様の御生前から従ったペテロ、ヨハネ等の使徒達を中心とする土着の穩健派である。彼等はヘブル語(行伝六・一B)、即ち当時のアラム語を話す人々であった。彼等、肉に於いてイエス様に親しんだ使徒達は、(御生前にもそうであったが)十字架の意味、復活の意味を、又律法との関係等を、古代の銅鏡をみる如く「おぼろげに」しか把握できなかった。それ故、伝統的ユダヤ教の礼拝と慣習とに絶縁することはできなかつた。ユダヤ教の信仰とは異なる明確な意識もなかつたと思われる。ユダヤ教徒側から言わせると、無害(ハームレス)な存在であった。それ故彼等は「絶えず宮もうでをなし」(二・四六)、恩師イエス様の審かれたサンヘドリンの庭で礼拝の時を守り(三・一〜三)「ソロモンの廊に集つて」説教(F:Fブルース・行伝P一三二)することすらできた。彼等は民衆の尊敬と、擁護(五・二六)すらかち得ていた。勿論、使徒筆頭であるペテロにエルサレム神殿の当局者が注目して、圧迫を加えたことは事実であろうが、そこには嵐のようなステパノの場合と異なるものを感じる。圧迫者達もサドカイ派の宮守りがしらや、祭司長の家の者達で(五・二四)、ユダヤ教の理想主義者又律法主義者であるパリサイ派の人々の名がみえず、サンヘドリンの学者ガマリエルの厚意的辯護すらきかれる。

否、パリサイ派の人々から集令に帰衣する者も多かつた。

註1 三・一。「午後三時の祈りのとき」エルサレム神殿の祈禱式（シエモネ・エスレの祈り十八の祝福）である。（ダニエル・ロブス、イエス時代の日常生活P七八）。

註2 ガマリエルの辯護的演説については、「ルカの筆」として争われている。断定不能。

ステパノの殉教後に加えられたエルサレム集会への迫害に対しても、使徒達はむしろ安全であったという注目すべき、奇異な句が八・一Bにある。彼等使徒達は六・一〜六の記事と併せ考えるとき、初期エルサレム集会内のヘレニストの信仰が、あまりに急進的極端とみなしてか、或は、その旺盛な活動が、反つて誤解？と圧迫を招くとしてか、むしろ兄弟達の排除されるのを見送つた観がある。

又宗教的偏見に捕われないヘレニスト達が、サマリヤに逃れサマリヤ人達に勇敢に伝道活動をするときも、使徒達の傍観的態度が推想される。活動のあとから、ノコノコと母教会の権威で公認にゆく趣がある。（O・クルマン、アルパ新書、川村氏訳「イエスと当時の革命家たちP一〇五に学ぶ」）。

第三は恐らくパリサイ派から帰依してきた律法主義者達のグループである。エルサレム集会内の自由の信仰の活動家達であるヘレニストが排除駆逐されて、（或は彼等第三のグループが原因か？）、これに代つて次第に勢力を伸して来たのが、先にも述べたパリサイ派の終末観を抱いて律法の励行によりて神の国が近づ

き、義人は律法（己が義）によりて生くと信じる人々である。

今日ではユダヤ教徒達はイエスは、改革的予言者の一人と信じられてゐる由である。そして、やがて血族關係を重んずるユダヤ人の伝統により主の兄弟、「義人ヤコブ」（コリント前・十五・五〇）が次第に集会の柱として、ペテロやヨハネがエルサレムを離れるに従つて彼等をしのぐようになったと思われる。しかも始末の悪いことには、これら律法に熱心な人達は、エルサレム母教会の歴史的権威をカサに着て、ヘレニスト達や、パウロの開拓した集会に査察に来て、律法（割礼や未改宗の異邦人との交りの監視）を強要し、パウロの使徒職は、エルサレム教会の承認を完ない自称勝手な偽使徒である、として中傷したのである。パウロが命がけて宣伝えた、人は信仰のみによつて救われる、この福音の自由を脅かしたのである。行伝十五・五の「ところが、パリサイ派から信仰にはいつてきた人たちが立つて「異邦人にも割礼を施し、またモーセの律法を守らせるべきである」と主張した。とはエルサレム教会内の性格を物語つてゐる。ペテローバレスチナの踏みかためられた信仰地盤の中で、イエス様に随従時代から、幾度も失敗を繰返しながら、純情素朴で直情径行、新しい真理をまもるに柔軟性を示したペテロ、一又旦ではイエス様を受け入れないサマリヤ人を「天から火をよび下して焼き払う」ことを求めた「雷の子」（ボアネルゲ）のあだ名を頂いた烈しく純粋なヨハネ（ルカ・九・五四。マルコ・三・十七）。彼等が福音を伝えて

エルサレムを去るに及んで、エルサレム集会の大勢は律法主義者でかためられ、ユダヤ教徒と変らない存在となった。彼等は紀元七〇年のローマによるエルサレム攻略と共に歴史の流れから消え去った。ひとたびは聖霊降下を体験したのであろう穏健派の人々も、恩恵と使命を実生活の活動に転じない信仰は、情性と形骸の中に死滅したものと思われる。

福音に対して柔軟性のある理解をもったペテロが（エルサレム集会の律法主義者達の勢力が、ペテロや、ヨハネを居ざらした面もあるのではないだろうか）ヘレニスト達がアンテオケ集会で、割礼のない異邦人達と、ユダヤ人の慣習に拘束されることなく、親しく食卓を共に（同信兄弟の聖餐）している美しい光景に接したとき、感動して、ペテロもバルナバも、この交りに加わっていたのであろう。そこへエルサレム集会のヤコブのもとから派遣された律法主義者の査察員達が来たため、ペテロは怖れをなして態度を変えて、異邦人との交りから身を引いた。このことは割礼ということが、使徒達をも拘束した重いユダヤ人の伝統であったかを改めて知る。そして割礼なくして信仰のみで救われるとの確信に立って、割礼なき異邦人伝道を使命としたパウロの厳しい追求をうけた（ガラテヤ二・十一〜十四）。のみならず、同じヘレニストで、かつては、兄弟達の激しい迫害者であったパウロ（パウロ）の回心を認めて、アンテオケ集会に連れてきて紹介の

労をとった、パウロの先輩である「バルナバまでが、そのような偽善に引ずり込まれた」と。

この衝突は、勿論福音の本質の認識把握、又信仰の徹底性の相違、事の本質を見抜く大事な時のパウロの強さ、ペテロの弱さ（マルコ十四・六九〜七二）であるが、一面には既にエルサレム集会に於けるペテロの軽視が察せられる。又この事件が、初期エルサレム集会で（行伝四・三六〜三七）又アンテオケ集会で（九・二六〜二八。十一・二二〜三〇）有力な働きをしたバルナバが、やがてパウロと袂を別つ（十五・三六〜四一）に至る伏線となったであろう。又エルサレム母教会をかさに着て信仰査察にきた律法主義者達に対して、パウロが妥協したとも考えられぬ。ルカは筆を避けているが、アンテオケ集会内では後輩であるパウロの、こうした強硬な態度は、集会員の感情的反感も呼んで、軋、乃至みぞが出来たことも考えられる。アンテオケ集会が以後パウロにとって次第に住みここのよい集会でなくなつたと考えてよいと思う。彼の曲げられぬ主張が、自ら建設した集会でないだけに、それだけ複雑な立場と心理で、後のガラテヤの諸集会等の場合とは異ると思われる。

「勇者は一人立つ時最も強し」（シルレル）

パウロは前進した。バルナバと別れて、彼はキリキヤの峽門を通り、タウルスの山を越え、彼が旦て厳しい福音伝道の戦で土台をすえたデルベ、ルステラ、イコニオム、ピシデヤのアンテオケ

等、南ガラテヤの諸集会の信仰をかためた。ルステラでパウロは若き伝道のアシスタント、テモテを得た。

イエスの受難研究一（一）

マタイ二六章一一一六節

菊池 信生

始めに、なぜ、「イエスの受難」をテーマに選んだかをお話いたします。

七月上旬のある日、O兄から電話がありました。「夏期聖書集会のテーマを若い者が選ぶようにと、水戸の集会で決まったので、テーマを考えてください」と言う事でした。

しばらく考えて、その日のうちに私はO兄に、受難物語の前半分捕縛までを塚本訳をテキストに使って学びたい旨を伝えました。どうして、マタイ二六章一〜五六節を取り上げたかと申しますと、二つ理由があります。

一つは、今年四月にヘルムート、リングの指揮するシュトットガルト・バッハ合唱団が来日して、NHKホールでマタイ受難曲の演奏がありました。私は、NHKホールでこの演奏を聞いて深く感動してしまつた。これが一つです。

もう一つは、この演奏とは別に、イエスの受難の意義とキリスト者であるがゆえに受けなければならない苦難との関係について学びたくなつたのです。

イエスは、その御生涯で一度も罪を犯さなかつた神の子でありながら十字架に掛けられました。十字架による処刑、これにまさる残認非道な刑はないと思います。肉的な苦痛はもとより、イエスの精神的な苦しみは、私共の想像を絶します。それも、神の命令に従順に服従したがゆえに十字架に掛けられる。この矛盾―私にはどうしてもそう思えるのです―が人類の罪の贖いのために必要だつたと、簡単に片付けて良いのだろうかと思ひます。

罪を犯しても、人は信仰により救われると、聖書は述べているように思います。アブラハム、ダビデ、ヨブなど罪人でありながら、正しい信仰を持つていたので救われました。ところがイエスは罪を犯さず、この世を愛したがゆえに、神の御旨通りに生きたゆえに殺されるとは一体どうしたことなのかと、思ひます。

このように、イエスの受難について考えると、これがキリスト者の苦難の意義とどのようにかわるのかというのが、私の疑問でありました。

では、福音書は何と言っているのでしょうか。以下学んでゆきます。

塚本訳では、一一一六節に標題「陰謀と香油と反逆」があります。

二六章一節から受難の物語は始まります。

イエスは、これまで受難の予告を三回しています。二節で、イエスはあさつての過越の祭の日に、敵の手に引き渡される、と言います。イエスのこの発言に、弟子たちは無言のままでした。弟子たちは無関心だったのかも知れませんが、イエスの言葉の意味を全く解せなかったのです。イエスは、十字架の死を目前に控え、悲しみ、苦しみました。弟子たちの無理解がイエスの悲しみをより深いものにしたのではないのでしょうか。

過越の祭は、ユダヤ人がエジプトから逃れ出たことを記念する独立記念日でありました。各地からユダヤ人はエルサレムに集まりヤハウエに感謝のいけにえを捧げる日でした。祭の二日前には、一般のユダヤ人は祭の準備をしていたことでしょう。彼等が喜びの訪れを待っていたその日から、イエスの受難が始まったのでした。イエスが十字架につけられるために敵の手に渡されると語っていた頃、大祭司連と国の長老たちは大祭司カヤパの官邸に集まっていました。イエスを殺す計画を立てていたのです。彼等はイエスを支持する群衆が多かったことを恐れて（マタイ二一章八、九、二六）、群衆のいないところで計画を立てたのです。一見、イエスに従うかに見えるこの群衆が二日後には、イエスの処刑に同意するのですから、群衆ほど頼りにならないものはありません。陰險極まるイエス殺害計画のなかに、頼りにならない群衆

心理をイエス殺害のために巧みに利用することがすでにあったのではないのでしょうか。

六一一三節は香油の物語です。イエスは、昼エルサレムで教え、夜ベタニヤで過ぎられました。

ベタニヤはオリブ山の東、エルサレムから約3キロの小さな村です。夕方になってイエスはベタニヤのラザロ、マルタ、マリヤの兄弟の家に来られました。

イエスは迫りくる死を前にして悲しみに沈み、その御顔には死の影が漂っていたのでしょうか。

マリヤは、イエスのこのご様子に接して、これは本当に大変なことだ、どうかして慰めてあげたいと思いました。マリヤは大切にしまっておいたナルドの香油の入っている壺を持ってきて（ヨハネ伝一二章三）、無言のままイエスの頭に注ぎかけたのでした。イエスはマリヤのするにまかせました。

やがて香油の香りが部屋を満たしました。ナルドの油は花嫁の使った香料だったと思います（雅歌四章一〇〜一四）。マリヤはナルドの油を自分の嫁ぐ日のために大切にしまっておいたのではないのでしょうか。この香油は三百デナリ（約百万円）する高価なものでした。（ヨハネ伝一二章五）。

聖書には、生前のイエスを直接愛したという記事は、ルカ伝七章三六一五〇とマリヤのこの行為の二つしかありません。

マリヤの愛の行為を否定する声が、たちまち部屋に満ちた愛の香りをかき消してしまいます。

弟子たちはこれを見て、憤慨して言った。

「なぜこんなもつたいないことをするのだろう。これは高く売られて、貧乏な人に施しが出来たのに。」(八一―九)

弟子たちはイエスを愛さなかっただけでなく、イエスを愛するマリヤの愛をも否定した。人の愛を否定する弟子たちの言葉には、聞く者の心に凍り付けさせる響があります。これまで、イエスと寝食を共にし、教えを受けてきた弟子たち。イエスが死を目前にして悲しみ、苦しんでいるご様子を誰よりもよく知っているはずの弟子たち。この弟子たちがマリヤの行為を否定しようとしたのです。彼等はただマリヤだけを責めたわけではありません。マリヤのするままに任せているイエスもイエスだ、そんなもつたいない事をマリヤに止めさせたらどうだという意味が、弟子たちの発言の言外にあります。間接的にイエスを責めているのです。マリヤは何も答えることができませんでした。九節の弟子たちの発言は、これまでのイエスの教えが弟子たちには少しも理解されなかつたことを意味し、彼等自身が自らそれを述べているのです。しかも、彼等はイエスを理解していると思ひながら、客観的に見れば、少しもイエスを理解していなかつたのです。

ここに弟子たちの悲劇的な絶望があり、それはますますイエスの苦悩を深める結果になりました。(イエスは自らマリヤの弁護をされたのでした(一〇―一三節))

一四―一六節は、イスカリオテのユダの反逆がテーマになっています。ユダはなぜイエスを裏切つたのでしょうか。

これは不可解な謎だと言われています。

西洋では、ユダは裏切者の代名詞として呼ばれている程です。

ユダに対する弁護もなされています。ユダを弟子の一人として選んだのはイエスではないかと、ユダの弁護者は言います。

ユダがイエスを裏切つた事實は、事実として認めなければならぬと思います。マリヤから香油を注がれて、喜んでいるイエスを見て、ユダは失望したに途いない。これまで、イエスはパリサイ人、律法学者等と激しい論戦を交し、勝ち進んで来ました。過越の祭に各地から集まつてきたユダヤ人の力を結集して、イエスがユダヤの王となることを、ユダはイエスに期待していたのかも知れません。ところが、イエスは過越の祭が近づくにつれますます苦悩の色を濃くしていったのです。期待していたイエスのメシヤ像が突然消え失せ、ユダの心が動揺しました。多分そのとき、サタンがユダに入つたのではないのでしょうか(ヨハネ伝一三章二七)。

イエスを殺す計画は以前にもありました(マタイ伝一第二章一四)。しかし、実行できませんでした。今や、ユダの裏切りによ

り、大祭司連等のイエス殺害計画は可能になったのです。シケル銀貨三十枚によって実行の第一歩が踏みだされました。

交通事故の体験を通して

学んだこと

服部 依子

予感という言葉があるが、事実、それはあった。最近の満たされた生活を思い、このような生活に甘んじてよいのだろうか、何かガツンとやられるかも知れない気が一度ならずしていた。本当の信仰を与えられるための聖旨だったのかも知れない。六月二日、日曜日水戸での集会の帰途、私共一家四人の乗った車は、右折信号を出し停車中のところを、居眠り運転の車に追突され、全員重軽症を受け五才の長女が一番重く、私共は深く悲しみ心を痛めました。

もう五分余りで自宅に着くという時、私は助手席でぼんやりと車の流れの切れるのを待ちながら夕食の献立を頭で描き、子供二人は後席で眠っていました。

突然強い衝撃と同時に意識を失ったようでした。暫くして主人の叫び声で気がつきましたが、すぐ雲の中にも引き入れられるように、ゆらゆらとあたりが回転し眠くなっていきます。何度も何度も耳もとで「子供を！子供を！」と叫ぶ声でやつと我に返りました。大声で泣いている子供を抱きかかえると歪んだドアからなんとか這い出し近くの店で急救車を待ちました。子供たちは

ショックで脅え、泣きじゃくって堅く私共にしがみついておりますが、そのうち五才の信代が「頭がわれそうに痛い痛い」と言いながら嘔吐しはじめました。この時から危険な状態にあることを直感し心は乱れつつも懸命に祈りました。病院に着くと玄関前で医師の手に移され、頭部X線撮影と脊椎穿刺の結果、頭蓋骨骨折、脳内出血の診断でした。二女の直子は打撲で軽症、私共二人は頸椎捻挫という首の骨がずれてしまった状態で、私はあと5mmで即死といわれた位、骨が歪んでいました。主人は後始末等で一時外出しましたので、むづかる直子をおぶったり、あやしなから、信代の頭を上下から冷やしました。信代は意識を失って昏睡状態にあり、その間も幾度となく嘔吐しました。私は不思議な程冷静さを保つことが出来、足に裂傷を受け多少不自由ではありましたが、主人と二人で信代の看護に徹することが出来たのは本当に幸いであつたと思います。

信代は外傷が全然ありませんでしたので、一見、午睡でもしているように思いたい気持ちでしたが、院長の言葉は以外にも「極めて危険な状態で今夜がやま」ということでした。

仙台の吉原先生、米子の両親に事態を告げ祈っていただくようお願いしました。吉原先生御自身、お子様のワクチン禍で、その時、どんなに祈られたことか、しみじみと感じました。夜半、教友の方々が次々と見舞つて下さり励まし助けて下さいました。

幼稚園の園長先生、主任の先生、担任の先生もかけつけ、ベツトに上つて信代の手足をさすり「のんちゃん頑張るのよ」と力づけて下さいました。

父は電話で「朝には意識が戻るといふ靈感を頂いた。子供に体をよせて一晚中祈るように。頭を打ったことに依つて、逆に、知能がよくなるように祈っている」と申しました。多くの方々の祈りと励ましに支えられて、長い一夜が明けていきました。いろいろな事を考える一夜でありました。

朝になつて信代は自らベットに起き上がりました。この時を境に、急速に回復をはじめ、一週間目の脳波、I-Q測定の結果、奇蹟的にも快癒し知能も異常なく、医師、看護婦が驚かれました。

日増しに元気になり、走り廻りベットはいつも空っぽという有様で院長も喜ばれ十三日目に退院いたしました。

自宅に戻りました信代は早速、レター紙に、先生やお友達あてに「おみまいにきて ありがとう」と沢山書いておりました。

子供ながらに感謝の心をこんな形で表わしているのを感じました。この度の事故に於いて教えられたことは限りなく、本当に感謝で一杯です。

多くの方々の祈りが文字通り一つとなつて聖前に上り、それを神様がきき入れて下さったことを思います。

昏睡から覚めてもあとの経過が――その事を一番案じましたのに、何という有難いことか、こうして書いていても涙が流れまです。神様は人間の思わぬ時に、思わぬ形で試練を与えられることがあります。

そしてそれに対し深い計らいをもつて恩恵を用意して下さいることを如実に感じました。

又、子に対する親の愛がどれ程大きな力を持つているか知り同時に父なる神様は私達を子として愛され、罪を救うために御一人子を十字架につけられた苦しみを知ることが出来ました。

ふり返つてみると罪深い者であるのに不信仰の罪をも許されキリストの愛に立ち返らせて下さった事を、新たに示されました。

そして、私共は多くの方々に愛され、覚えられ、祈られていることを知り、その祈りによつて支えられていることを今更の如く教えられました。

神様の計り知れないみ恵と、隣みを思い感謝しきれぬ思いでした。

この感謝を生涯持ち続け度く子供たちにも事にふれ話していいうと思ひます。

神様が、多くの方々を通し示された御愛、そして祈りに、今度は、私達がお応えしなくてはならぬことを思ひます。

このようにして、また、わたしどもの手に戻していただいた大切な子供たち、神様からのお預りのものと本当にお役に立つものとして祈りつつ育てていきたいと思ひます。

そのために、わたしどもの信仰がいよいよ増し加えられ深められますよう、又、後遺症についても、お祈りいただきますようお願い致します。

私共は、信仰によつてこの苦しみと戦いました。

信仰の種を、播いてくれた両親に感謝するとともに、こどもたちも将来、み言によつて慰められ、祈りによつて勇気を与えられ、信仰によつて正しく歩んで欲しいと祈ります。

第十二回横川聖書集会の概要

日時 八月十七日、十八日

場所 茨城県久慈郡里美村横川鉦泉中野屋

研究題目 イエスの受難(塚本虎二訳 マタイ福音書)

二六章一〜五六節)

第一日

集合 十五時 司会 半田梅雄

第一講 マタイ二六章序論 桜井五郎

第二講 陰謀と香油と叛逆(一〜一六) 菊池信生

第三講 最後の晩餐他(一七〜三五) 鬼沢力男

第四講 ゲッセマネ(三六〜四六) 宇野輝

第二日

早天祈禱会 司会 松本友子

第五講 捕縛(四七〜五六) 司会 小貫武寿

感話会 司会 半田梅雄

石原秀志

今年も夏期聖書集会を開くことが出来た。参加者は十三名、いつもの顔ぶれの中に、佐藤幸輝君や松本智昌君のような新人も加って二日間(実質二十時間程度)の短かい会期ながら、実に内容豊かな勉強会となった。

テーマは「イエスの受難」研究、福音書の中の頂点、キリスト数の中心点にいきなりふれてゆくこの研究を五人の担当者が分担した。節を追って、リレーされてゆく勉強の仕方は、一人の講師によって一貫してされる講義とは又異なる幅を感じさせる。四つの福音書が、イエス伝をそれぞれの角度から語りかけるような味わいさえある。神許し給わば、この続きを来年も字ばせて頂きたいと思う。

今回は、桜井兄が欧米出張中の為、菊池兄の担当分を第一講として掲載し、逐次、分載してゆきたいと思う。

(半田)

『後記』

謹んで「水無」誌第七十三号をお届けします。私ごとで恐縮ですが、今年も、茨城国体に続く第十回全国身体障害者スポーツ大会が本県で開かれたため、責任者の一人として、多忙の中の編集で、少し難産でご心配をおかけしました。悪しからずおゆるし下さい。

宇野兄のテサロニケ人への第一の手紙の勉強、パウロの手紙の歴史的背景を鮮明に理解させてくれます。服部姉の体験記、如何なる苦難もキリストの愛より我らを離すことはできないことをしみじみと思えます。菊池兄のイエスの受難研究は、およそ真剣に人生を生き、聖書に真理を求めめる者が、必ず取り組まねばならぬ問題への最初の肉迫です。

秋ようやく深く、紅したん、梅もどきの赤いつぶら実が、日毎に空気の清澄さの中にあざやかさを増してゆきます。祈ります。

(半田)